

最近のハクチョウ給餌事情

荒尾稔

113-0021 東京都文京区本駒込4-38-1-505

福島県双葉郡楢葉町の大堤、いわき市の夏井川、千葉県本埜村は、いずれも高濃度餌付けハクチョウ群で知られています。これらの越冬地のいずれでも、この冬(2003年11月現在)には給餌の仕方が変わり、越冬するハクチョウたちの生活環境に大きな変化が生じています。

それは、餌を1日2回から1回に減らしたことです。この結果、朝からハクチョウ群は餌場を求めて大挙飛び立ち、昼間は川からほとんど姿を消しています。でも夕方までにはすべて戻って、餌にありつくように行動が変わってきました。

これは、最初夏井川白鳥を守る会の小野会長さんが始めたことで、効果は抜群です。昨年まで1日中餌場前に400羽も滞留していたハクチョウが、1~5羽を除いて近在の国道の両側の田んぼに数群に分散して採餌を始め、真っ白に見事な光景が見られるとのこと。雨で水のたまった水田の畦の間で、主に落ち穂を食べているとのこと。

これを聞いて、本埜村でも同様にしたところ、近在に採餌地を求めだしたとのこと。楢葉町でも同様です。

朝、餌を断つことで、ハクチョウ群はいやでもあちこちと採餌地を探しだします。でも昼間の採餌が不十分であっても、夕方の給餌がありますので、ねぐらと体調管理を目的とした餌付け機能は崩れません。給餌回数を少なくした効果として、給餌の絶対量が大幅に減少し、管理する側の負荷が軽減され、その結果、餌等の費用が軽減されます。

ハクチョウたちは、昼間の観光客からの餌を期待して居残るか、自分で餌を探すかの選択をすることで、多様な生き方を選択できます。なによりも餌付けではなく、自立してきちんと生活能力を身につけたハクチョウとなります。

もともとは、今年の冷害で餌の確保が厳しい渡来地の事情もありました。でも、野鳥への給餌が問題になっていることもありますし、全国の大量渡来地では、このような試みは大いに参考になるかと思えます。